

# 日本列島と朝鮮半島の木製有文当て具についての基礎的研究

寺井 誠

---

**要旨** 本稿は、土器製作の際に用いられる木製有文当て具について、日本列島と朝鮮半島の当て具の出土事例や土器の内面に残る当て具痕跡の観察を通じて、共通点・相違点を明示し、将来的に当て具痕跡を基にした交流の研究につなげるための基礎的研究である。その結果、日本列島のもはほとんどの場合が同心円文で、木目の影響を受けなくとも同心円文を踏襲するが、朝鮮半島については木目とは関係なく、平行文や格子文が刻まれ、当て具文様についての基礎的な認識が異なる可能性があることを確認することができた。また、北部九州や北陸地方などで見られる同心円文以外の当て具（平行文など）については、朝鮮半島の影響を受けた可能性があると考えた。

---

## はじめに

本稿は、日本列島と朝鮮半島の木製有文当て具及び土器内面に残る有文当て具痕跡の観察を通じて、共通点・相違点を明示し、将来的に当て具痕跡を基にした交流研究につなげるための基礎的研究である。

日本列島では、古墳時代から古代の遺跡で数多くの須恵器が出土する。そして、製作の際に内面に生じる当て具痕跡については大半が同心円文（青海波文）であり、それに対応する木製当て具も複数見つかっている。一方、朝鮮半島では三国時代新羅・加耶や統一新羅の土器の内面には同心円文・平行文・格子文などの多様な有文当て具痕跡が見られ、特に、日本列島では大多数を占める同心円文が朝鮮半島では幾種類かの当て具痕跡の中の一つに過ぎないのである。

日本列島と朝鮮半島の間には古墳時代～奈良時代、三国時代から統一新羅時代に多くの交流があったということはさまざまな研究で明らかになっているが、当て具痕跡でもその研究展望が描かれることを筆者は今まで触れてきた（寺井2019・2020a・b）。本稿では冒頭で記した通り、当て具の復元を念頭に置きながら、両地域の相違点・共通点を示したうえで、交流関係を探る基礎的視点を定めたいと思う。

なお、本稿で扱う遺跡の位置については図1に示した。また、図に掲載した資料を本文中で指す場合、例えば図3の7の資料は3-7とゴシック体で表記することとした。

## 1. 当て具及び当て具痕跡についての研究史

当て具及び当て具痕跡の研究において基本的な方向性を定めたのは横山浩一氏で、特に製作技法の中での当て具の使用法についての研究を深めた（横山1980・1981・1984・1985・1987）。これらの研究は横山氏の表現を借りるなら、タタキメに加え当て具痕跡についても、「器面におけるあり方を法

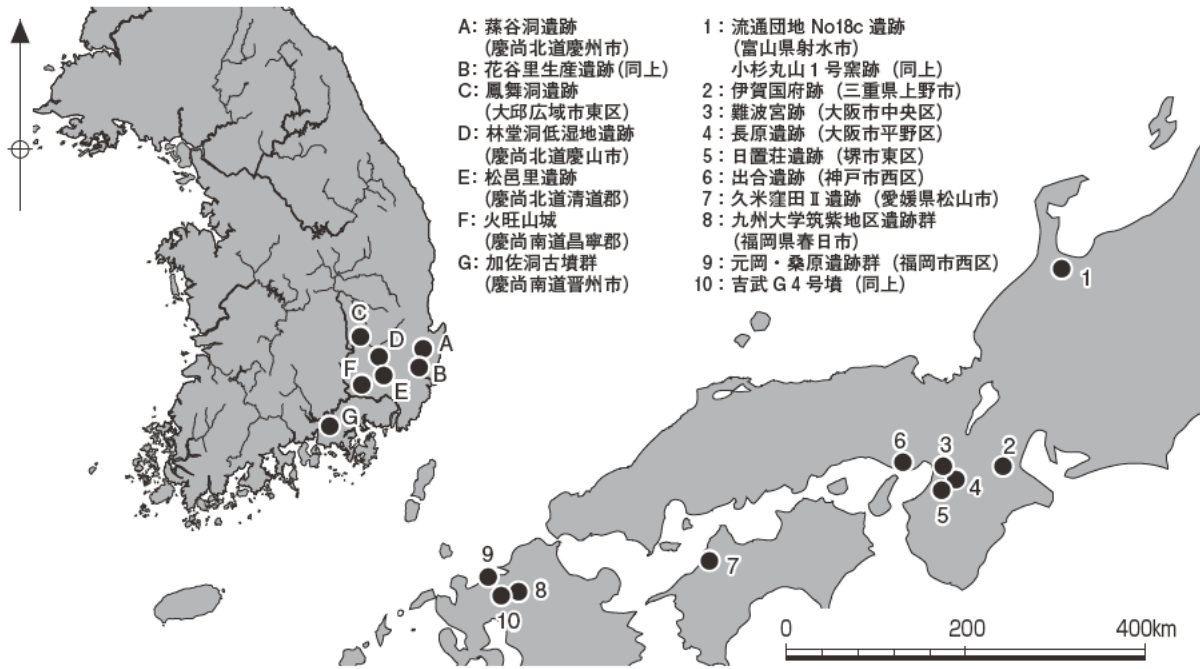


図1 本稿で取り上げる遺跡の位置

則的に把握すること」に努め、「文様という「語彙」を論じたものではなく、「文法」を発見すること」を目指すものであり、九州大学筑紫地区遺跡群出土の2種の木製当て具の研究でより具体化した(横山1987)。なお、横山氏は上記研究が当て具痕跡そのものの研究ではないとしているものの、当て具痕跡から当て具を復元する研究についても重要な視点を提供している。「玄界灘式製塩土器」の内面の当て具痕跡が平行線や緩やかな弧線を描くことから、木目の圧痕と判断し、芯持ち材に限らない木材を利用していることを推測したのはその一例である(横山1984・1985)。

一方、当て具痕跡から原体の同定に力を注ぎ、特に木目との関係で子細な観察視点を提供したのは内堀(花塚)信雄氏である(花塚1985、内堀1988)。内堀氏はタタキメや当て具痕跡の差異から作業単位を明らかにできるという見通しでこのような研究に着手する中で、同心円文や平行文、格子文などさまざまな当て具痕跡を検討し、その中で同心円文当て具痕跡については、「木目の見られないもの(a類)、年輪状に木目の見られるもの(b類)、柁目状に木目の見られるもの(c類)」に細分し、b類については、同心円文と年輪の中心が同じものをb1類、異なるものをb2類とした(内堀1988)。また、細かい線の同心円文については「細同心円文」とし、文章では触れていないが、無文で年輪が露出した当て具の痕跡と察する(以上の分類は図2の下に示した)。これらは木製当て具を作る際の木材利用法を反映するものでもある。なお、こういった原体復元の視点は、柿田裕司氏(柿田2000・2001・2003)や望月精司氏(望月2000・2001・2013)など北陸古代土器研究会の諸氏に継承された。

近年では亀田修一氏が有文・無文当て具および当て具痕跡についての研究成果を続けて発表している(亀田2018・2020、長尾早江子・亀田2019)。亀田(2018)では自身が継続的に携わっている邑久窯跡群(岡山県備前市)の発掘調査で出土した奈良時代の須恵器甕の内面に着目し、平行文や格子文、扇状文など同心円文以外の有文当て具痕跡が多い点を指摘し、当て具痕跡の特徴を把握することに

よって、流通関係の研究に寄与できるという展望を示した。長尾・亀田（2019）では古墳時代から古代の車輪当て具痕跡を集成する中で、放射状文などに統一新羅の土器と共通する点に着目し、日本列島・朝鮮半島を含めた比較研究の必要性を指摘した。また、亀田（2020）では無文当て具の検討を主としつつ、木製当て具の当たり面についての検討も行い、線刻せずに木目が浮き出たものがあることから、同心円文当て具痕跡が線刻によるものか否かの検討が必要であることを指摘した。これは当て具痕跡から当て具を復元する際に非常に重要な視点であるため、後でも触れたいと思う。

続いて、韓国における当て具・当て具痕跡についての主要な研究を振り返ってみよう。

金斗喆氏は礼安里遺跡（礼安里古墳群：慶尚南道金海市）で出土した土器のタタキメの重複関係からタタキ技法についての考察を行う中で、当て具痕跡についても若干の検討を行った（金斗喆2001）。そして、4世紀代は無文当て具痕跡が多く、5世紀後半以降は有文の当て具痕跡が残るものが増えるという傾向を指摘した。さらに、有文当て具痕跡は同心円文・平行集線文・放射状文といったバリエーションがある中で同心円文が多いとし、その同心円文は木の芯の部分を利用していることを想定した。

鄭仁盛氏は楽浪土器の製作技法の研究の一環で、当て具痕跡から当て具を復元することを試みた（鄭2004・2005・2007・2014など）。例えば、壺や大型の盆（大型の鉢）の内面観察で、横方向の縄文の圧痕が口縁部内面や胴部の上位に残り、それを切って同心弧文や平行文の弱い線の当て具痕跡が残っていることを観察し、前者については1次成形で円筒形の器形を作る際に棒に縄を巻いた当て具によるものであり、後者は2次成形で胴部を膨らます際のタタキで使われた当て具の痕跡であり、その痕跡から木製当て具の痕跡で木目が浮き出したものであるとした。また、鄭（2005・2007）では製作実験によりこの工程を立証した。異なる種類の痕跡やその重複関係を基にして製作技法を復元し、さらには当て具の復元も試みた優れた研究である。

李恩政氏などは全羅北道東部の遺跡で出土した加耶土器を観察したうえで、製作実験を通じての製作技法の研究を進める中で、タタキ板・当て具の復元を試みた（李恩政ほか2008）。対象とした資料は全羅北道長水郡の加耶古墳出土の平底深鉢などであり、これらには有文の当て具痕跡が残っている。用いられた当て具については、甕器と呼ばれる大甕の製作道具を参考にしながら、当たり面に線刻した木製当て具であると推定した。

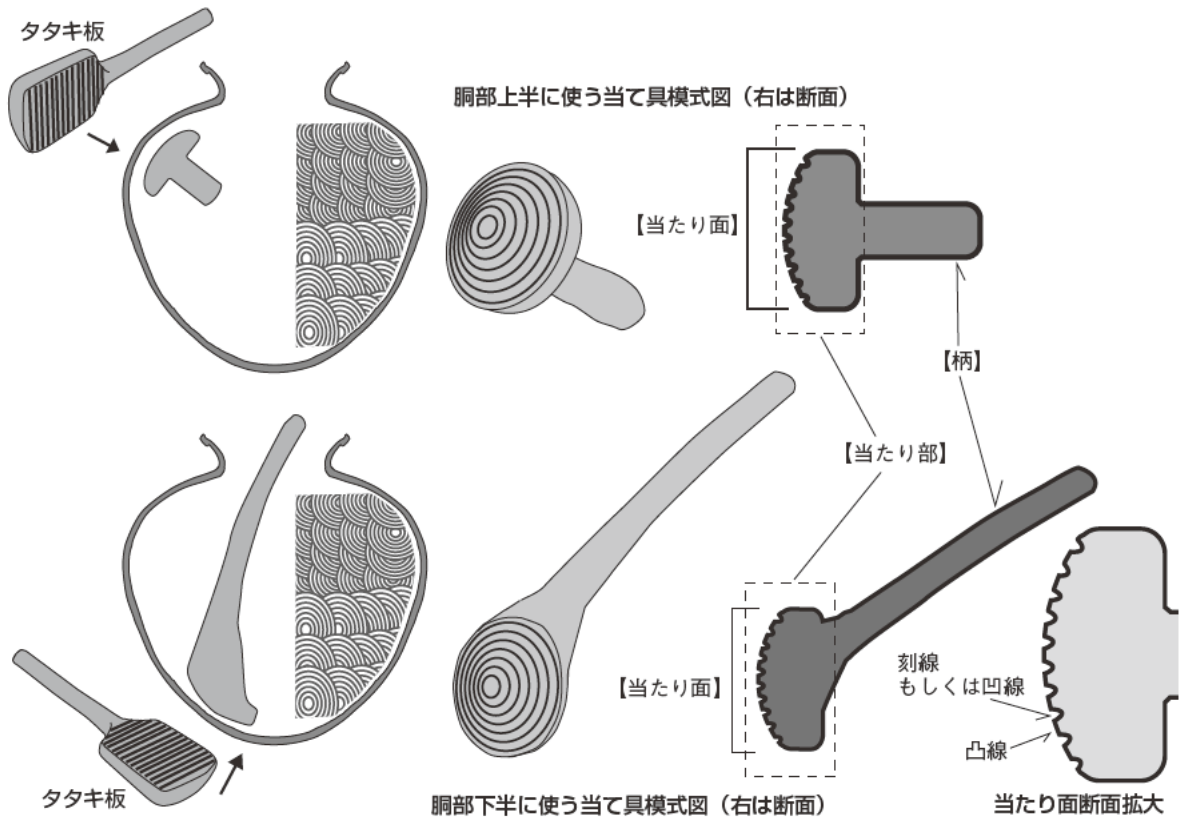
なお、筆者自身はこれまで当て具痕跡の観察から、①6世紀後葉～7世紀の北部九州の平行文当て具が地域的特徴を示すとともに、朝鮮半島の加耶・新羅の影響を受けて登場した（寺井2018・2019）、②8世紀代の山陰や北陸といった日本海側の地域に平行文などの同心円文以外の当て具痕跡があることを基にして（望月2006など）、日本海側からの須恵器の搬入を確認できる可能性があること（寺井2020a）、③大阪府下での古墳時代の酸化焰焼成の土器で、内面に平行文当て具痕跡のあるものは加耶土器の可能性があること（寺井2020b）などを示してきた。当て具痕跡を基に地域間交流の研究ができるという展望を持っているが、その根本となる当て具についての研究は十分ではなかった。上記で紹介した当て具の復元につながりうる研究事例は、研究視点において大変参考になるものである。

## 2. 有文当て具の各部位の名称および観察視点の整理

本稿では有文当て具痕跡を主たる対象としているが、まずは無文当て具痕跡との違いについて触れておきたい。有文とは当て具痕跡に何らかの文様が転写されていることを指す。もともと無文当て具であったとしても、使用し続けたことにより木目の凹凸が顕著になり、それが転写されれば有文当て具になるとともに、その痕跡は有文当て具痕跡となる。よって、人為的に線刻したか否かについて、当て具痕跡を基に識別するのは難しいのが実情である。

続いて、便宜的ではあるが、本稿で用いる当て具の部位の名称を定めておきたい (図2)。

「当て具」は、土器をタタキ技法によって製作する際に内側から押さえる道具である。内面から叩くという一面もあることは認めつつも、「当て具」と呼ぶことが多いため、それを踏襲したいと思う。また、土器の内面に当たる面を「当たり面」、当たり面がある膨らんだ部分を「当たり部」、当たり部の背面に伸びて、握る部分を「柄」、当たり面に刻んだ線は直線・曲線にかかわらず「刻線」とし、



|          |           |           |          |       |
|----------|-----------|-----------|----------|-------|
|          |           |           |          |       |
| 同心円文 a 類 | 同心円文 b1 類 | 同心円文 b2 類 | 同心円文 c 類 | 細同心円文 |

内堀 (1988) を基に作成した同心円文と木目の関係

図2 有文当て具及び使用模式図 (同心円文の場合)

刻んだか否かはっきりしない場合は、「凹線」、「凸線」と称することにする。

一方、当て具痕跡は当たり面が土器の内面に当たった圧痕である。有文当て具の凸線、凹線は当て具痕跡での凹線、凸線に対応することは言うまでもない。また、製作時に当たり面のすべての面が当たったわけではなく、かつ、いろんな角度で当たり、重複が激しくなることによって、ひとつの単位がわかりにくくなるとともに、当て具痕跡自体が変形することもある。つまり、当て具痕跡は当たり面の形状をそのまま反映するスタンプではないということも念頭に置いておく必要がある。

なお、当て具痕跡から当て具を復元する上ではいくつかの課題がある。まず、当て具が木製なのか土製、もしくはそれ以外の材質なのかという点である。当て具痕跡からこれを区別する視点は、痕跡内に木目があるか否かという判断材料しかない。さらに、木目が見えない場合でも、上述のように有文当て具痕跡が木材の消耗の結果として生じた凹凸を反映しているのであれば、当て具が木製か否かを判断するのは現実的には困難である。逆に、木目の圧痕が残っていて、その単位が明瞭に見える場合は、それが芯持ち材か柁目材かを判断でき、木材の利用方法を知ることができる。これは内堀氏が提供した視点であり、亀田氏も当たり面への人為的な刻みに着目するなかで、木目との関係を重視している。例えば、図2の「同心円文b2類」や「同心円文c類」のように、当て具痕跡の凹線・凸線と関係ない方向に木目の痕跡があるということは、当たり面に線刻したことを物語っている。

また、当たり面の輪郭がスタンプの如く丸ごとわかる事例はほとんどないが、当て具痕跡に縁の一部の圧痕が残っている場合がある。当たった際の圧で変形がありうるという前提で見ないといけないものの、縁が円弧を描くものや、直線的なもの、さらには直線的に伸びて円弧を描くものなどが観察できることがある。こういった縁の情報を組み合わせることによって当たり面の輪郭の復元につなげることができる。

### 3. 木製有文当て具の事例

当て具痕跡の観察から当て具を復元するためには、事例は少ないものの実際の当て具の特徴をよく把握しておく必要がある。下記では筆者が実物調査を行った中で、当て具痕跡を理解するために有益と思われる観察結果を示したいと思う。なお、図3には筆者が把握している限りの木製当て具を転載した。無文が1例、同心円文が8例、平行文が2例である。なお、3-1・8・12については実物観察ができていないため、図の紹介に留める。

#### 1) 年輪に沿って同心円文を刻んだ当て具（長原遺跡）

大阪市平野区の長原遺跡NG86-41次調査のSE01（井戸）から須恵器や土師器、横槌、鉄斧柄などの木製品（註1）、鞆羽口などとともに、木製当て具3-2が出土した（大阪市文化財協会1993）。共伴の須恵器がTK10型式に該当することから6世紀中葉に位置付けられる。

さて、この当て具は柄が斜めに取り付き、当たり面は弱い凸面を呈し、輪郭は楕円形である。マツの芯持ち材を使った一木作りで、当たり面については丸太を斜めに切ったものを加工している。亀田（2020）で的確に説明されている通り、当たり面の同心円文は一見、年輪に沿っているように見えるが、凸線上にも年輪が観察されるとともに、年輪に沿わずに直線的に伸びる凹部や、円弧に取り付く接線

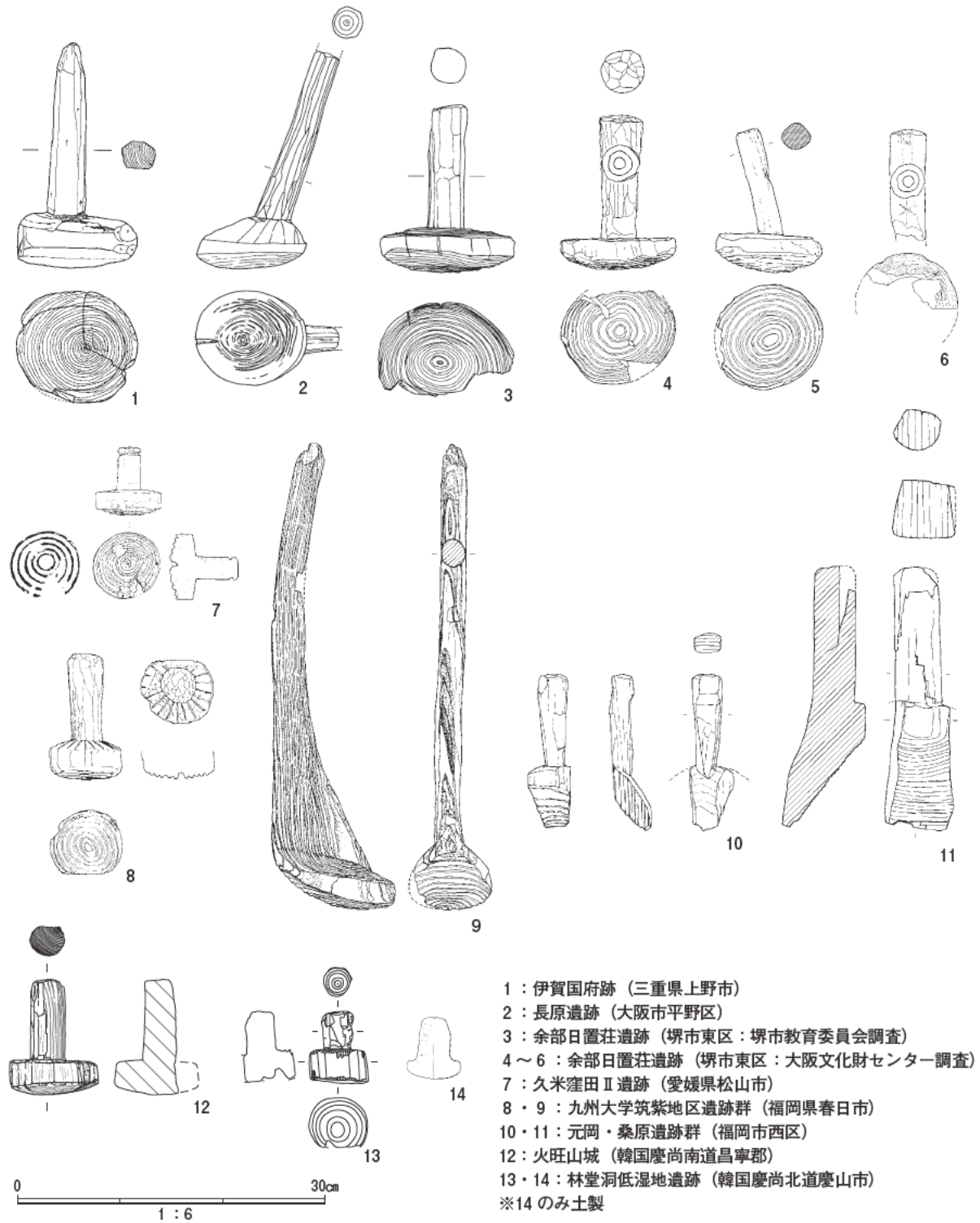


図3 木製当て具の事例

の如く直線的な工具痕跡(刃物傷)が残っている(写真1-1・2)。このことから、刀子のような工具で両側から直線的に切り込んで線刻したことがわかるとともに、当たり面についてはあまり使用されていないせいか、木目は浮き出してはいない。なお、このような当て具を用いた場合、同心円文当て具痕跡が生じることになるが、もし、当たり面の消耗が進めば木目が露出し、内堀(1988)の「同心円文b1類」のような当て具痕跡が生じるとされる。

また、柄が斜めで長さがあるという点では、後述する九大出土の**3-9**のように、底部側を叩く際の当て具で用いられた可能性が考えられる。その際に斜めに柄が取り付く故に、内面に当たる向きが固定され、当て具痕跡はほぼ同じ方向のものが並ぶことが予測される。

## 2) 木の消耗により同心円文が生じた当て具 (余部日置荘遺跡)

堺市東区の余部日置荘遺跡にて、堺市教育委員会調査地で1点 (**3-3**)、大阪文化財センター (現大阪府文化財センター) 調査地で3点 (**3-4 ~ 6**) の計4点の木製当て具が出土した (堺市教育委員会1992、大阪府教育委員会・大阪文化財センター1995)。**3-3**については灰原下面の旧河川堆積層から木製タタキ板とともに一ヶ所でまとまって出土し、灰原からはTK10型式を中心とする須恵器が多量に出土している。また、**3-4 ~ 6**については7世紀初頭を下限とする遺物を含む旧河川から木製タタキ板2点とともに出土し、近くの須恵器窯跡ではTK10型式の須恵器が焼成されている。このことから当て具**3-3 ~ 6**についてはいずれも6世紀中葉のものと推定する。

4点のうち**3-6**は破損により柄と当たり部に接点がないため、取り付け方がわからないが、**3-3・4**は背面中央に垂直方向に、**3-5**は斜めに取り付け、一木作りであることが観察できる。いずれにも当たり面には同心円文が見られるが、その凹凸は木目 (年輪) に沿っている。**3-3**の破損した断面を見ると、年輪の軟部が凹み、硬部が突出していることがわかる (写真1-4)。さらに**3-3 ~ 6**を観察した限りでは、**3-2**のような刃物による傷は見られなかった。よって、余部日置荘遺跡の4点の当て具については、木が痩せた可能性も考慮しなければならないが、当たり面に同心円文を刻んだのではなく、消耗により凹凸が生じたもので、亀田 (2020) を追従することとなった。なお、樹種については、**3-3**は同定されていないが、**3-4 ~ 6**はコウヤマキと報告されている。

このような当て具を用いた場合は同心円文当て具痕跡が生じることになり、当て具痕跡から人為的に当たり面に刻んだのか否かの判別は困難であろう。

## 3) 年輪に沿わずに同心円文を刻んだ当て具 (九州大学筑紫地区遺跡群)

福岡県春日市・大野城市にまたがって広がる九州大学筑紫地区遺跡群において、6世紀後葉の須恵器が伴うSD623からタタキ板1点、当て具2点がまとまって出土した (横山1987、九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室1994)。説明が詳しい横山 (1987) を参照しながら筆者の観察結果を述べたいと思う。

「当て具1号」(**3-8**) は芯持ち材を用いた一木作りで、キノコ状の形態に仕上げられている。当たり面は弱い凸面を呈し、木芯は中心から外れた位置にある。同心円文は年輪と関係なく刻まれ、その同心円文の形状については厳密に表現するなら、中心部に近いところについては隅丸三角形を呈している。木目と刻まれた凹線との関係についても、刻線に木目が横断することになり、凸線上には細かい凹凸が生じている (写真1-5)。

「当て具2号」(**3-9**) も芯持ち材を用いた一木作りであるが、**3-8**と同じく年輪とは一致しない同心円文、さらに厳密に表現するなら、楕円形の同心円文が刻まれている。その結果、刻線に木目が横断することになり、凸線上には細かい凹凸が生じている (写真1-6)。以上2点の当たり面については、木目とは異なる同心円文が刻まれていることから、当て具痕跡は内堀 (1988) の「同心円文b2類」になるであろう。



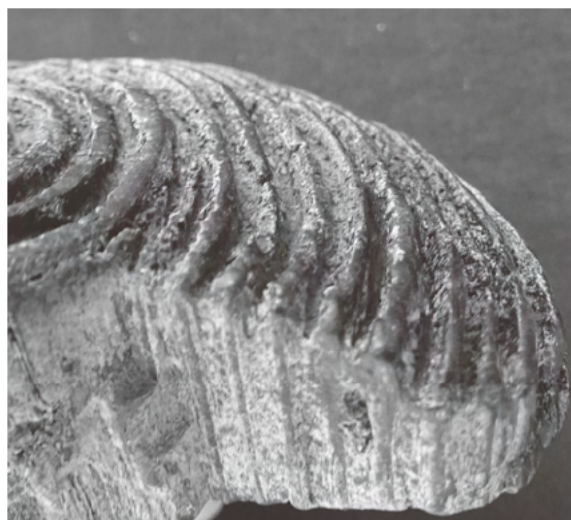
1 : 3-2 の同心円文の当たり面 (約 0.5 倍)



2 : 3-2 の当たり面に見られる刃物傷 (約 1.8 倍)



3 : 3-3 の同心円文の当たり面 (約 0.5 倍)



4 : 3-3 の当たり部の断面 (ほぼ実物大)

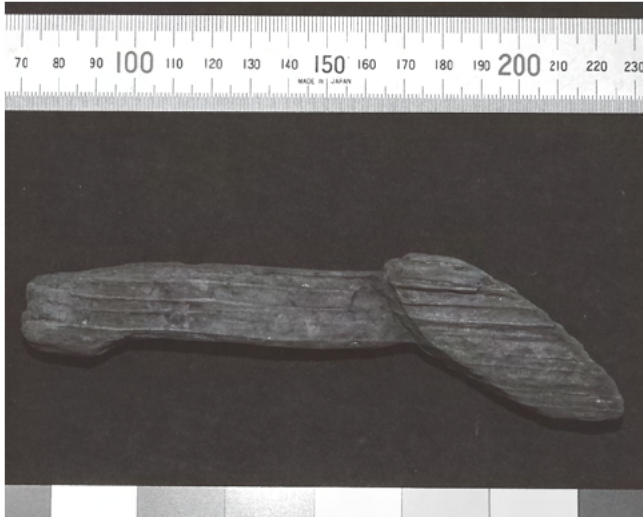


5 : 3-8 の同心円文の当たり面 (約 0.7 倍)



6 : 3-9 の同心円文の当たり面 (約 0.7 倍)

写真1 木製当て具の当たり面 (1)



7 : 3-10 の側面 (約 0.5 倍)



8 : 3-10 の平行文の当たり面 (ほぼ実物大)



9 : 3-13 の側面 (ほぼ実物大)



10 : 3-13 の同心円文の当たり面 (ほぼ実物大)

写真2 木製当て具の当たり面(2)

なお、柄については3-8が当たり部の背面に対して垂直に、3-9が斜めに取り付けられている。後者については底部側の成形に用いられたことが推定されるとともに(横山1987)、長原遺跡の3-2や余部日置荘遺跡の3-5と同じく、当たり面が当たる向きを固定することにつながると思われる。

#### 4) 木の消耗により平行文が生じた当て具(元岡・桑原遺跡群)

福岡市西区に位置する元岡・桑原遺跡群第18次調査の池状遺構から2点出土した(福岡市教育委員会2010)。共伴遺物の多くは7世紀代のものであるが、一部は9世紀以降のものもある。

2点のいずれも芯持ち材ではなく、柁目材の一木作りである。当たり面の木目はいずれも平行線に近いものの、緩い弧を描く。当たり部は大きく欠損していて、縁の部分がほとんど残っていないため、本来の当たり面の輪郭はわからない。保存処理が終わった3-10の当たり面を観察したところ、木目が露出した凹凸があるものの、刻んだ痕跡は窺えなかった(写真2-8)。3-11については保存処理が終わっていないため、詳細な観察はしなかったものの、3-10と同様に木目が露出した当たり

面である。よって、本来は無文であったものが、使用を重ねることにより、木目が浮き出したものと推測する。

なお、柄についてはいずれも当たり部の背面に対して斜めに取り付いていることから（写真2-7）、これが土器の内面に当たった場合は向きがほぼ固定されることになり、木目に由来する横方向の平行文を残すことになる。

#### 5) 木の消耗により同心円文が生じた朝鮮半島の当て具（林堂洞低湿地遺跡）

慶尚北道慶山市の林堂洞低湿地遺跡のpit32（調査区）の9-2層から木製品3-13が出土した（嶺南文化財研究院2014）。嶺南文化財研究院（2008）では同じ地区・層の土器が報告されていて、それを見る限り三国時代の4世紀後葉～5世紀前葉頃のものと思われる。

報告書では当て具とはされていないが、横断面が凸字形を呈し、当たり面に該当する部分は直径4.8cm、全長7.0cmであり、柄の先端を見る限り加工されていることから、柄の短いのは欠損ではなく完形品であることが窺える（写真2-9）。樹種はマツと報告されていて、側面は木の表皮に近い部分の芯持ち材を加工している。当たり面に該当する部分は平坦で、年輪の硬部が突出し、同心円文を呈するが、刃物で刻んだ痕跡は看取できない（写真2-10）。当たり面に該当する部分は平坦で、日本でよく見られる木製当て具と違って凸面ではない。

日本列島の事例と比べかなり小振りであるものの、同じ地区・層で同じくらいの大きさの土製無文当て具3-14が出土していることから、当て具の可能性があると考える（註2）。加えて、後述するように、韓国で資料調査をしている中で平坦な同心円文当て具痕跡が見られたことは、このような木製当て具が使われていたことが窺える。

## 4. 当て具痕跡の観察例

冒頭で触れた通り、須恵器などの内面に見られる当て具痕跡は圧倒的多数が同心円文である。ただ、この同心円文についても意図的に刻んだものとそうでないものがあることが上述の木製当て具の観察で再確認することができた。ここでは筆者が観察した範囲で様々な当て具痕跡を紹介し、木目圧痕の有無などを通じて多様な木製当て具の可能性について検討したい。

### 1) 車輪文当て具痕跡（長原87号墳の須恵器壺）

大阪市平野区の長原87号墳（長原遺跡NG83-38次調査）の方墳の造り出しの埴輪列の中に埋置された状態で、須恵器壺4-1が出土した（大阪市文化財協会2006）。外面は擬格子文タタキで、木目と条線は直交する。内面の下半については当て具痕跡の中央部が見られ、中央に「オ」字状の圧痕がある車輪文当て具痕跡である（写真3-1）。上半については「オ」字状の圧痕は見られないものの、同心円の円弧の部分のみで、当て具の外側部分の圧痕しか見られないことから、下半と同一の当て具を用いたか否かは判断できない。なお、同心円文の部分については木目が浮き出たものか、人為的に線刻したものかは判別できないが、中央の「オ」字状の圧痕は線が明瞭で自然には生じにくいものであることから、人為的に刻んだ結果と考える。当て具痕跡の中に木目が見えないが、「オ」字状の圧痕の周囲は同心円文で年輪の可能性があるので、原体は木製と推測する。

なお、富加見泰彦（1991）によると陶邑では田辺編年のMT15型式、6世紀初頭から車輪文当て具痕跡が見られるというが、本資料はTK23型式で5世紀末頃に当たることから若干古くなる。少なくとも5世紀末には当たり面に線刻した木製有文当て具が用いられたことを示唆する。

## 2) 平行文当て具痕跡（難波宮跡NW13-6次調査地の須恵器甕）

難波宮跡公園から約200m南西に位置する調査（大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015）で出土したものであるが、ここで紹介する須恵器甕4-2は未報告で、寺井（2019）で実測図を掲載した。調査記録によると、飛鳥時代の整地層から出土したものである。

4-2は外面に擬格子文タタキメ、内面には上位に同心円文当て具痕跡が若干残り、それらは平行文当て具痕跡で切られている。外面のタタキメやカキメの残り方から胴部下半と考えられる。内面の平行文をよく見ると、これに直交する方向の浅い段があり、直線的であるがやや丸みを描いている（写真3-2）。この段を境に平行文が不連続であるため、これは当て具の縁の圧痕であり、当たり面の輪郭は長楕円形であると推測する。なお、同様の当て具の縁の圧痕は三ツ枝遺跡（福岡県小郡市）の須恵器窯跡出土須恵器の内面でも確認したことがある（小郡市教育委員会1995、寺井2018・2019）。

平行文の中には明らかな木目の圧痕は見えないが、当て具痕跡の凹部が細く、凸部が太いことから、木目の凹凸が反転したものではないかと推測する。前述の元岡・桑原遺跡群の木製当て具3-10・11のような、斜めの柄で方向が固定される当て具を用いたのではなかろうか。

上町台地北端ではこれ以外にも飛鳥時代の平行文当て具痕跡が残る須恵器が出土している（寺井2008など）。北部九州に数多くの事例があることから、上町台地北端で出土する平行文当て具痕跡を有する須恵器は北部九州からの搬入品と思われる。さらに、吉武G4号墳（福岡市西区）の須恵器甕4-3のように、北部九州では胴部上半は同心円文、下半は平行文当て具が使い分けられる場合が多いという点も共通する（福岡市教育委員会1998）。なお、4-3についても下半の平行文の方向が揃っていることから、上記と同じく方向が固定される当て具を用いたことが推測される。

## 3) 朝鮮半島の平行文当て具痕跡（加佐洞古墳群の短頸壺・台付長頸壺）

慶尚南道晋州市に位置する加佐洞古墳群の1区間三国時代37-1号墳より出土した短頸壺4-4である（慶南発展研究院歴史文化センター2018）。還元焰焼成であるが、やや甘い仕上がりである。なお、この古墳は報告書では6世紀第2四半期に位置付けられている。

4-4は外面には平行文タタキ、さらに詳しく言うなら木目が横方向に伸び、条線が縦方向の擬格子文タタキが施されている。内面には丸く浅い凹みの中に平行文当て具痕跡が残る（写真3-3）。なお、観察する限りではこの当て具痕跡の中に木目の痕跡は見いだせないため、用いた当て具が木製なのか否かはわからないが、凹みの形状からやや凸で輪郭が丸い当たり面をもつ当て具を用いたことは読み取れる。木製の無文当て具が消耗して、柁目の木目が露出したのではないかと推測する。

4-5は同じ古墳群の2区間三国時代15号墳石室の2次屍床で出土した台付長頸壺である。新羅の土器様式のものであり、時期は6世紀後葉である。内面には木目と直交する方向に刻まれた平行文、すなわち擬格子文の当て具痕跡が観察できる（写真3-4）。また、ところどころに丸い縁の圧痕が見えることから、当たり面は円形であったと思われる。なお、擬格子文の当て具痕跡については梧川里

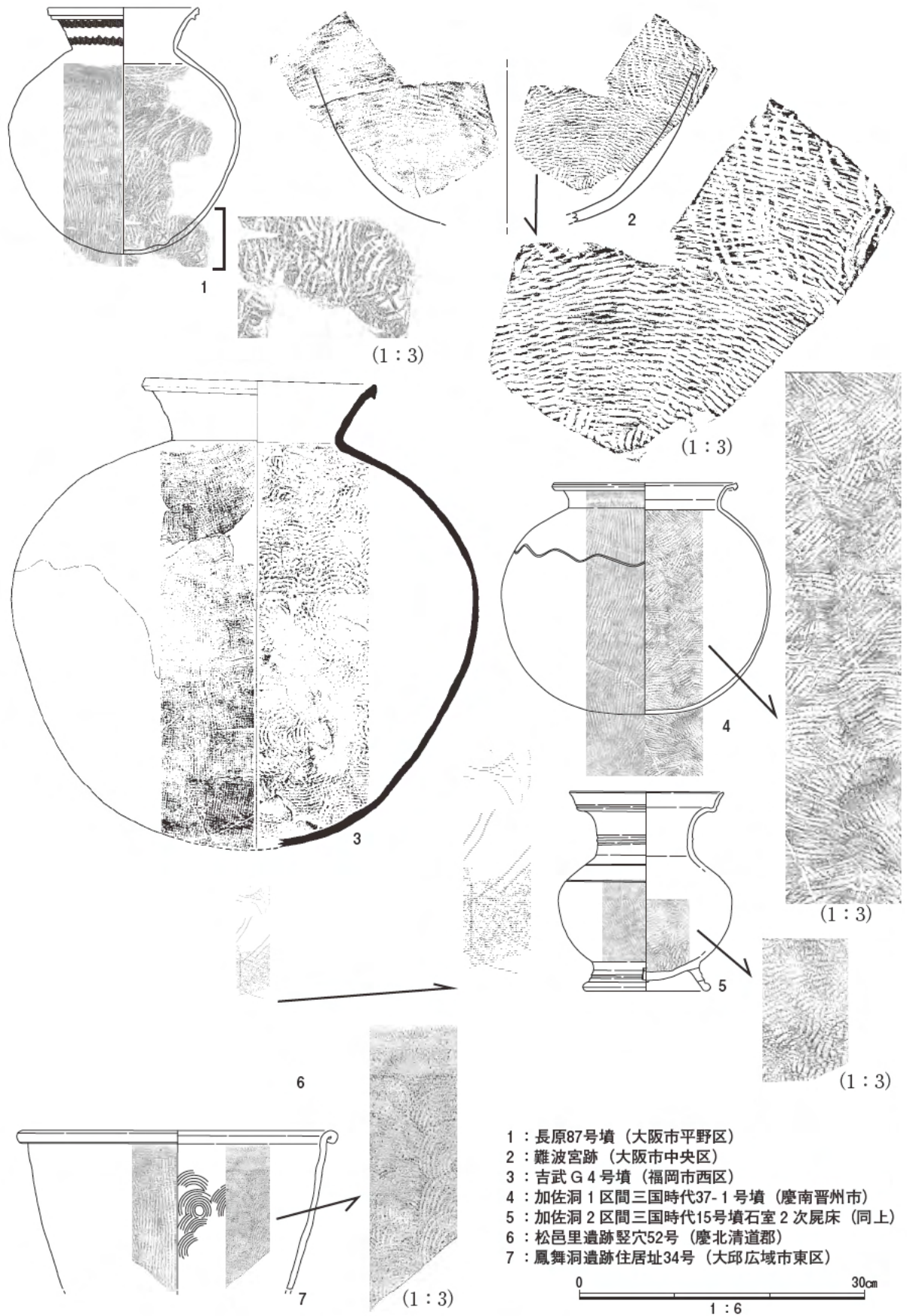
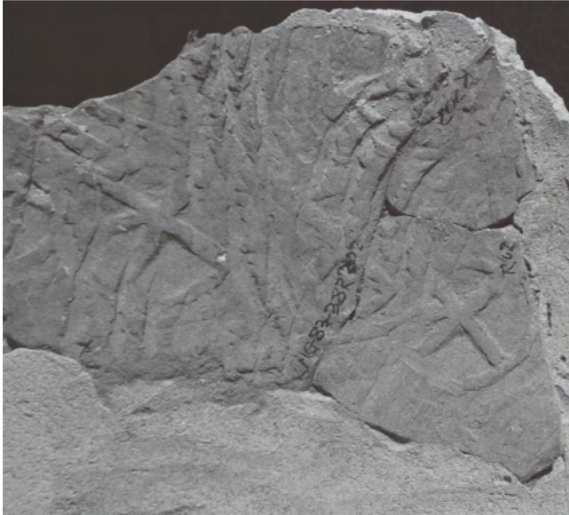


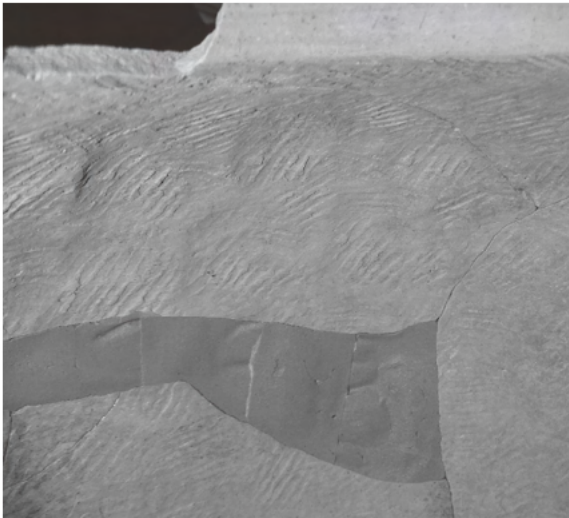
図4 有文当て具痕跡の残る須恵器・陶質土器・軟質土器



1 : 4-1 の車輪文当て具痕跡 (ほぼ実物大)



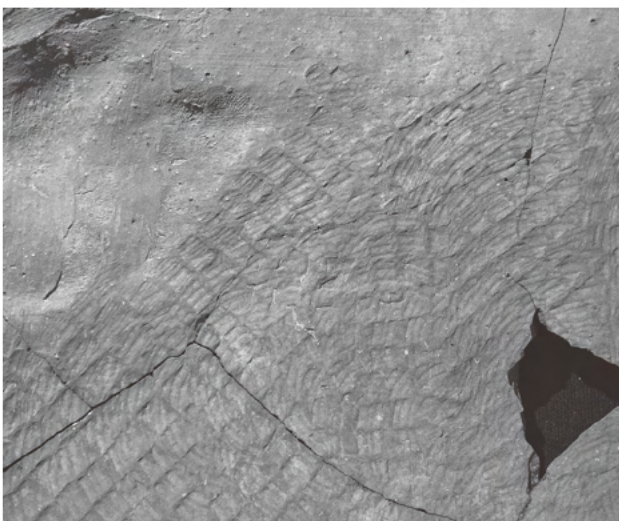
2 : 4-2 の平行文当て具痕跡 (約 0.8 倍)



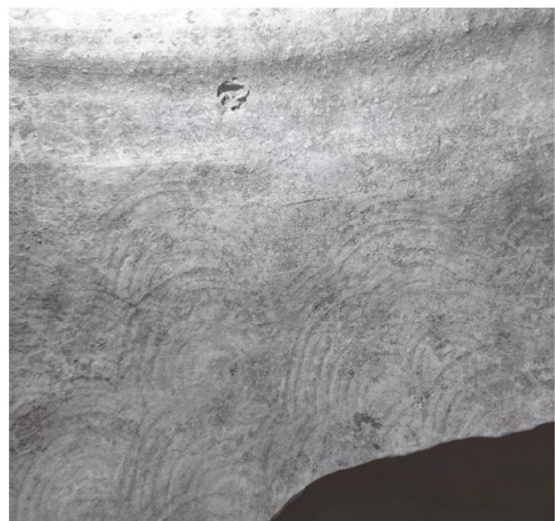
3 : 4-4 の平行文当て具痕跡 (約 0.5 倍)



4 : 4-5 の平行文 (擬格子文) 当て具痕跡 (ほぼ実物大)



5 : 4-6 の格子文当て具痕跡 (約 0.7 倍)



6 : 4-7 の同心円文当て具痕跡 (約 0.7 倍)

写真3 有文当て具痕跡の事例

3号石槨墓（慶尚南道宜寧郡：慶南発展研究院歴史文化センター2014）の事例を紹介したことがあり（寺井2018・2019）、朝鮮半島ではしばしば観察されるものである。

#### 4) 朝鮮半島の格子文当て具痕跡（松邑里遺跡の把手付甕）

慶尚北道清道郡に位置する松邑里遺跡の竪穴52号より出土した、還元焰焼成の把手付甕もしくは壺4-6である（慶尚北道文化財研究院2005）。明確に時期がわかる共伴遺物はないものの、この土器の把手が中空で統一新羅時代に多く見られる特徴であること、近接した遺構では統一新羅時代の8世紀頃の土器が出ていることから、その頃のものとして推定する。外面は格子文タタキが施される。

内面には凹部の一辺が4mm前後の格子文当て具痕跡が残っていて、当て具痕跡の単位と重なるように細い線の同心円文、すなわち年輪の圧痕が残っていることを確認し（写真3-5）、芯持ち材を用いた木製当て具であることが明らかになった。報告書ではこの木目についての記載はなく、拓本でも確認できず、実物確認をして初めてわかったものである。筆者はこれまで慶尚道で何度か資料調査してきた中で、複数の個体で平行文や格子文、扇状文などの有文当て具痕跡の中に木目が看取できるものがあった。

#### 5) 朝鮮半島の同心円文当て具痕跡（鳳舞洞遺跡の鉢）

大邱広域市東区に位置する鳳舞洞遺跡の住居址34号から出土した酸化焰焼成の鉢4-7で、共伴遺物から統一新羅時代初頭の7世紀後葉のものと思われる（嶺南文化財研究院2011）。外面には縦方向の縄文タタキが施される。内面には線の凹凸が小さい同心円文当て具痕跡が残り、内堀（1988）の「細同心円文」に該当する。おそらく、芯持ち材で硬部が若干浮き出た程度の木製当て具を用いたものと推測する。また、当て具痕跡自体はほとんど凹まず、平坦に近いことから、時期は異なるものの前述の林堂洞低湿地遺跡の3-13のような平坦な当たり面の木製当て具が用いられたものと推定する。

### 5. 両地域における木製有文当て具の出現と展開

以上、木製有文当て具および当て具痕跡の観察結果を述べた。まず、意図的に線刻した木製有文当て具がいつ頃から出現するかという点について、長原遺跡の3-2は刃物で同心円文を刻んだ当て具が6世紀中葉であり、今のところもっとも古い事例となる。ただし、ほぼ同時期の余部日置荘遺跡の事例が当たり面に線刻した痕跡がない木製当て具もあるため、人為的に同心円文を刻んだものとそうでないものが併存したことを示す。当たり面を線刻する事例がどこまでさかのぼるかという点について、一般的に須恵器内面を概観する限り、5世紀後葉～末頃には凹凸の明瞭な同心円文が観察され、5世紀末の長原遺跡の4-1のような車輪文当て具痕跡の存在もこれを補強する。同心円文が消耗によって凹凸が明瞭になったものか、それとも人為的に刻んだものか、当て具痕跡から読み取るのは現実的に難しいが、今後の観察視点として念頭に置くべきである（亀田2020）。

また、北部九州では6世紀後葉には図2の「同心円文b2類」が確認され、北陸地方では8世紀後半には「同心円文c類」のような当て具痕跡が増加する（柿田2001など）（註3）。興味深いのは、これらの地域で平行文当て具痕跡が見られるようになるのもほぼ同じ時期である点である。北部九州では6世紀後葉から7世紀に平行文当て具痕跡が一定量見られるようになり（寺井2019など）、元岡・

桑原遺跡群の3-10・11のような当たり面が柁目の木製当て具の存在もこれを補強する。北陸地方では平行文や格子文当て具痕跡が8世紀中葉には登場し、8世紀後葉～9世紀前半には広く見られるという（望月2013）。山陰地方や山陽地方でもほぼ同じ頃に同心円文以外の当て具痕跡が見られるようになり、北陸と類似した展開が予想される。以上のような状況は、畿内以外のこれらの地域において木製当て具を作る際に必ずしも木目に規制されなくなったことを窺わせるとともに、さまざまな当て具文様の出現につながる基盤になるのかもしれない。

一方、朝鮮半島では有文当て具自体は楽浪までさかのぼるものの、明瞭な有文当て具痕跡が見られるようになるのは5世紀後半以降と思われる（金斗喆2001）。本稿では6世紀代の加耶・新羅の平行文当て具痕跡を紹介した。明瞭な当て具痕跡は当たり面に線刻した当て具の痕跡であると推測するとともに、おそらく日本列島と同じ頃から登場するのではないかと思うが、十分な検討は及んでいない。なお、朝鮮半島の有文当て具痕跡は、同心円文・平行文・格子文など多様であり、このような多様性は少なくとも6世紀前葉には見られるが、筆者自身の朝鮮半島の資料に対する年代観が不十分なところもあり、さかのぼる可能性は十分ある（寺井2019）。同心円文や平行文については木目の圧痕と考えられるものも多く、管見による限りでは平行文が同心円文よりも多く見られる遺跡もある。これは木製当て具を作る上で、日本列島が芯持ち材を多用するのに対し、朝鮮半島はそれに限らないことを示している。

この日本列島と朝鮮半島との差異を如実に物語る事例として土製当て具を最後に紹介したい（図5）。日本列島では土製（註4）の無文当て具が20遺跡28点、有文が17遺跡21点ある（亀田2020）。本稿で関わる有文は7世紀中葉以降に見られ、8世紀代に多くなり、美濃須衛窯跡群やその関わりが深いと考えられる富山県域で多く出土している（望月2013、亀田2020）。文様のほとんどが同心円文で、一部に渦巻文、車輪文がある。渦巻文や車輪文を同心円文の垂流と見るなら、いずれも同心円文の系統であるといえる。

朝鮮半島では原三国時代以降、多数の土製当て具が出土しているが、ほとんどすべてが無文である。その中で非常に希少な例として、花谷里生産遺跡（慶尚北道慶州市）で当たり面に平行文を刻んだ土製当て具が出土している（聖林文化財研究院2012）。実物は未見であるが、報告書の拓本や写真を見る限り1条ずつ線刻しているようで、線が揺らいでおり、厳密な意味で平行には見えない。なお、平行文は三国時代の新羅・加耶や統一新羅時代に普通に見られる当て具文様である。

このような状況を見ると、日本列島では同心円文が優勢であるため、土製にもそれが反映され、朝鮮半島では多様な当て具文様があることから、土製に平行文が刻まれることにつながったのであろう。望月（2013）が示したように、土製に刻まれる文様はその地域の当て具文様に対する意識を反映し、日本列島に関しては木製当て具の当たり面に木目と関係なくとも同心円文が刻まれることが多いのはその表れと思われる。

一方、6世紀後葉から7世紀の北部九州、8世紀中葉以降の北陸地方、さらには山陰・山陽地方で同心円文以外の当て具や当て具痕跡があるのも確かである。これらの文様は同心円文とは異なるものであるが、前述の通り海を渡った朝鮮半島では普通にあり、4-5・6のように明らかに木製当て具

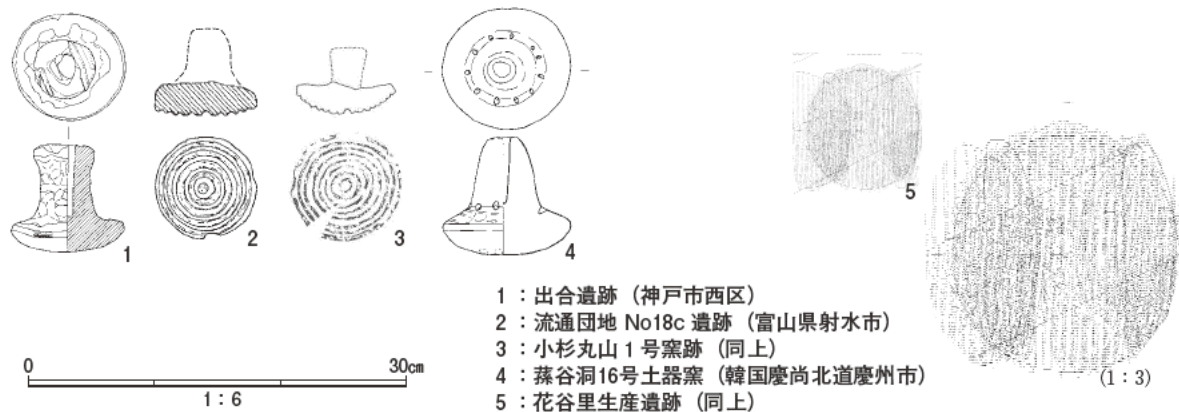


図5 日本列島と朝鮮半島の無文・有文土製当て具

を用いたことがわかるものもある。北部九州については朝鮮半島との関連を考えたことがあるが（寺井2019など）、8世紀代の同心円文以外の当て具痕跡についても、朝鮮半島との関連が十分考えられる（亀田2018など）。

以上から、日本列島における当て具の地域性の出現背景には、朝鮮半島からの外部的影響によって、当て具文様の多様性を生み出したとともに、木製当て具製作の際の用材の差異を生み出すことにつながったと想定する。これを補強するには、さらなる具体的な確認が必要であるが、木製当て具は出土数が少なく、当て具痕跡については木目の観察まで報告されている事例はほとんどない。本稿で取り上げた資料はすべて筆者が実見したものであるが、数量的な問題から時期的変遷や地域性を十分に描けるまでには至っていない。今後実物確認を重ねることが必須であり、それによって研究を前進させたいと思う。

本稿を作成するに当たり、亀田修一氏には長原遺跡の木製有文当て具（本稿の3-2）をいっしょに観察することを通じて、木目と刻線の関係を読み取ることの重要性をご教示いただいた。望月精司氏には普段よりご論考で学び、直接お会いした際にも当て具痕跡の観察点についていろいろとご教示頂いた。また、下記の方々や機関にも研究を進める上で大変お世話になった。末筆ながらこの場をお借りして御礼申し上げたい。（敬称は省略させていただきます）。

池峯龍彦、石川健、市村慎太郎、今井隆博、岡本淳一郎、谷直子、平郡達哉、廣瀬時習、松尾奈緒子、高恩禎、金孜澈、吳在振、李東冠、張龍俊、趙晟元、河承哲、咸舜燮

大阪府文化財センター、大阪府立近つ飛鳥博物館、九州大学埋蔵文化財調査室、堺市文化財課、富山県埋蔵文化財センター、福岡市埋蔵文化財センター、慶南研究院歴史文化センター、国立大邱博物館、国立慶州博物館

また、本研究はJSPS 科研費19K01106（有文当て具痕跡から窺える律令国家成立前後の地方の主体性と対朝鮮半島交流の研究）の助成を得た。

## 図・写真の出典

遺物の図については括弧内の文献より転載し、一部加工した。

図1：筆者作成／図2：一部、内堀（1988）を基に作成。他は筆者作成／図3：1（三重県埋蔵文化財センター1993）、2（大阪市文化財協会1993）、3（堺市教育委員会1992）、4～6（大阪府教育委員会・大阪文化財センター1995）、7（愛媛県埋蔵文化財センター1981）、8（九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室1994）、9（横山1987）、10・11（福岡市教育委員会2010）、12（ウリ文化財研究院2014）、13（嶺南文化財研究院2014）、14（嶺南文化財研究院2008）／図4：1（大阪市文化財協会2006）、2（寺井2019）、3（福岡市教育委員会1998）、4・5（慶南発展研究院歴史文化センター2018）、6（慶尚北道文化財研究院2005）、7（嶺南文化財研究院2011）／図5：1（亀田1989）、2（富山県教育委員会1982）、3（富山県教育委員会1984）、4（国立慶州文化財研究所2004）、5（聖林文化財研究院2012）

写真はすべて筆者撮影、各写真は次の機関より承諾済。

写真1：3・4：堺市文化財課、5・6：九州大学埋蔵文化財調査室／写真2：7・8：福岡市埋蔵文化財センター、9・10：国立大邱博物館／写真3：3・4：慶南研究院歴史文化センター、5：国立慶州博物館、6：国立大邱博物館

## （註）

（註1）この中で横槌については、使用面に砂が食い込んでいることから、土器製作の際に粘土塊の粉碎などに用いられた可能性が指摘されている。一方、タタキ板とされた木製品については小型の土器製作に用いられたと推測されているが、実物を観察したところ、①先端が摩耗して、横断面が丸くなっていること、②このような道具で生じたタタキメの事例が、少なくとも長原遺跡で見当たらず、管見による限り近畿地方でも見られないこと、③時期が異なるものの、平城京で出土した「杓子形木製品」に形状が類似していること（奈良国立文化財研究所1984、PL43-4307など）などから、ヘラなどの別の用途の木製品の可能性がある。詳細な検討はここでは控えるが、筆者はタタキ板の可能性は低いと考える。

（註2）この資料の存在は亀田修一氏、谷直子氏にご教示頂いた。そして、2020年2月3日に国立大邱博物館にて実物調査を行い、当て具の可能性が高いと考えた。

（註3）ただし、北陸地方で「同心円文b2類」のような当て具痕跡がいつ頃から見られるようになるのかは筆者自身未確認である。

（註4）亀田氏は須恵質の「陶製」と土師質の「土製」に分けているが、本稿では土製当て具について深く検討していないこともあり、一括して「土製」と称した。

## 参考文献

### <日本論文>

- 内堀信雄1988「須恵器費にみられる叩き目文について－北陸を中心として－」『シンポジウム 北陸の古代土器 研究の現状と課題 報告編』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 柿田祐司2000「須恵器甕の叩き目」『シンポジウム 古代の須恵器貯蔵具Ⅱ－貯蔵具の製作技術を復元する－』北陸古代土器研究会
- 柿田祐司2001「須恵器甕の叩き目から」『北陸古代土器研究』第9号 北陸古代土器研究会
- 柿田祐司2003「須恵器甕の叩き目に関する一実験」『北陸古代土器研究』第10号 北陸古代土器研究会
- 亀田修一1989「陶製無文当て具小考－播磨出合遺跡出土例の紹介をかねて－」『生産と流通の考古学 横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ』横山浩一先生退官記念事業会

- 亀田修一2018「備前邑久窯跡群の須恵器甕に関する覚書」『半田山地理考古』第6号 岡山理科大学地理考古研究会
- 亀田修一2020「無文当て具に関する覚書」『福岡大学考古学論集3－武末純一先生退職記念－』武末純一先生退職記念事業会
- 寺井誠2008「古代難波に運ばれた筑紫の須恵器」『九州考古学』第83号 九州考古学会
- 寺井誠2018「6～7世紀の北部九州の土器に見られる新羅・加耶的要素」『第13回九州考古学会・嶺南考古学会合同考古学大会 海峡を通じた文化交流』
- 寺井誠2019「当て具痕跡から見える新羅・加耶的要素－同心円文以外の当て具痕跡への着目－」『渡来文化の故地についての基礎的研究－新羅・加耶的要素を中心として－』平成28～30年度(独)日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書 大阪歴史博物館
- 寺井誠2020a「難波など畿内に搬入された他地域産須恵器－有文当て具痕跡を基にして－」『共同研究成果報告書』14 大阪歴史博物館
- 寺井誠2020b「上町台地北端及びその周辺に加耶系軟質土器－タタキメ及び当て具痕跡の観察を基に－」『難波宮と古代都城』(中尾芳治編) 同成社
- 長尾早江子・亀田修一2019「須恵器車輪文当て具文様に関する覚書－西日本を中心に－」『半田山地理考古』第7号 岡山理科大学地理考古学研究会
- 花塚信雄1985「叩き目文の原体同定－生産組織の解明に向けて－」『辰口町湯屋古窯跡』辰口町教育委員会
- 富加見泰彦1991「陶邑出上の車輪文について」『古文化談叢』第26号 九州古文化研究会
- 望月精司2000「須恵器甕の製作痕跡」『シンポジウム 古代の須恵器貯蔵具Ⅱ－貯蔵具の製作技術を復元する－』北陸古代土器研究会
- 望月精司2001「須恵器甕の製作痕跡と成形方法」『須恵器貯蔵具を考えるⅡ つほとかめのつくり方(北陸古代土器研究会 第9号)』北陸古代土器研究会
- 望月精司2006「日本海地域の古代土器生産」『日本海域歴史体系第二巻 古代編Ⅱ』清文堂
- 望月精司2013「須恵器甕の成形叩きに伴う当て具文様の意味－車輪文当て具と陶製当て具の検討から－」『白門考古論集Ⅲ 中央大学考古学研究会創設45周年記念論文集』
- 横山浩一1980「須恵器の叩き目」『史淵』第117号 九州大学文学部
- 横山浩一1981「須恵器に見える車輪文叩き目の起源」『九州文化史研究所紀要』第26号 九州大学九州文化史研究施設
- 横山浩一1984「玄界灘式製塩土器(上)」『九州文化史研究所紀要』第29号 九州大学九州文化史研究施設
- 横山浩一1985「玄界灘式製塩土器(中)」『九州文化史研究所紀要』第30号 九州大学九州文化史研究施設
- 横山浩一1987「須恵器製作用叩き締め道具の新例－九大筑紫キャンパス内出土品－」『東アジアの考古と歴史』下巻 岡崎敬先生退官記念事業会

#### <韓国論文>

- 金斗喆2001「打捺技法의 研究－金海禮安里遺蹟出土品을 中心으로－(打捺技法の研究－金海禮安里遺蹟出土品を中心に－)」『嶺南考古學』28號 嶺南考古學會
- 李恩政・パン・ミナ(방민아)・チョン・サンハク(전상학) 2008「타날 실험을 통해 본 문양연구와 타날기법 검토－호남지역 출토 3～6세기타날문토기를 중심으로－(打捺実験を通じて見た文様研究と打捺技法の検討－湖南地域出土3～6世紀打捺文土器を中心に－)」『야외고고학(野外考古学)』제5호 韓国文化財調査研究機関協會

- 鄭仁盛2004「樂浪土城의 土器 (樂浪土城の土器)」『韓國古代史研究』34 韓國古代史研究会
- 鄭仁盛2005「樂浪土器와 平기와의 제작기법 - 盆形土器의 관찰과 제작실험을 중심으로 - (樂浪土器と平瓦の製作技法 - 盆形土器の觀察と製作實驗を中心に-)」『낙랑의 고고학 (樂浪の考古学)』韓國上古史学会
- 鄭仁盛2007「낙랑 ‘타날문 단경호’ 연구-강원지역 원삼국시대 ‘타날문 토기’ 의 계보문제와 관련하여- (樂浪 ‘打捺文短頸壺’ 研究-江原地域の原三国時代 ‘打捺文土器’ の系譜問題と関連して)」『江原考古學報』第9号 江原考古学会
- 鄭仁盛2014「낙랑군의 토기문화 (樂浪郡の土器文化)」『낙랑고고학개론 (樂浪考古学概論)』(中央文化財研究院學術叢書18) 진인진 (ジニンジン)

### <日本報告書>

- 愛媛県埋蔵文化財センター 1981「久米窪田Ⅱ遺跡」『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015「中央区龍造寺町における建設工事に伴う難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW13-6)報告書」『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2013)』
- 大阪市文化財協会1993「長原遺跡西地区の調査(NG85-80、NG86-8・41次調査)」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅵ』
- 大阪市文化財協会2002『大坂城跡Ⅴ』
- 大阪市文化財協会2004「NW90-7次および85-39次調査」『難波宮址の研究 第十二』
- 大阪市文化財協会2006「NG18次およびその周辺の調査」『長原遺跡発掘調査報告XⅤ』
- 大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1995『日置荘遺跡』
- 九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室1994『九州大学埋蔵文化財調査報告-九州大学筑紫地区遺跡群-』(第三冊)
- 堺市教育委員会1992「日置荘遺跡発掘調査概要報告」『堺市文化財調査概要報告 第32集』
- 奈良国立文化財研究所1984『木器集成図録 近畿古代篇』
- 小郡市教育委員会1995『苅又地区遺跡群Ⅱ』
- 福岡市教育委員会2010『元岡・桑原遺跡群16』
- 福岡市教育委員会1998『金武古墳群 金武古墳群吉武G群の調査』
- 三重県埋蔵文化財センター 1993『三重県埋蔵文化財調査報告108-5:伊賀国府跡(第5次)・箕升氏館跡ほか』

### <韓国報告書>

- 慶南發展研究院歴史文化センター 2014『宜寧梧川里古墳群』
- 慶南發展研究院歴史文化センター 2018『晋州加佐洞古墳群と聚落』
- 慶尚北道文化財研究院2005「清道松邑里遺跡」『文化遺蹟發掘調査報告書 - 清道松邑里・楡湖里・内湖里遺蹟 -』
- 聖林文化財研究院2012『慶州花谷里生産遺跡 - 1区域本文(自然水路1) -』
- 嶺南文化財研究院2008『慶山林堂洞低湿池遺跡Ⅰ~Ⅲ』
- 嶺南文化財研究院2011『大邱鳳舞洞遺跡Ⅴ - 住居址・堅穴遺構 -』
- 嶺南文化財研究院2014『慶山林堂洞低湿池遺跡』
- 우리(우리)文化財研究院2014『昌寧火旺山城内集水施設』

## 일본열도와 한반도의 목제 유문(有文) 내박자에 대한 기초적 연구

데라이 마코토

본고는 토기제작에서 사용된 목제 유문(有文) 내박자를 다루는데, 일본열도와 한반도에서 출토된 내박자와 토기에 남은 내박자 흔적을 관찰하여 공통점과 차이점을 명시하고, 내박자 흔적을 바탕으로 한 교류양상을 밝히려는 기초적 연구이다. 그 결과 일본열도 출토품은 동심원문(同心圓文)이 대부분이고, 나뭇결의 영향을 받지 않더라도 동심원문을 사용한다. 이에 반해 한반도 출토품은 나뭇결과 관계없이, 평행문(平行文)이나 격자문(格子文)이 시문되는데, 내박자 문양에 대한 기초적인 인식이 다를 가능성을 확인했다. 그리고 북부 규슈(九州)나 호쿠리쿠(北陸) 지방 등에서 보이는 동심원문 이외의 내박자(평행문 등)는 한반도에서 영향을 받았을 가능성이 있다고 생각한다.